



← 平成24年6月2・3日開催の第65回「一高祭」テーマは『万華鏡』(案内パンフより)

← 若き命が躍動する学園祭や部活動。燃え盛った余韻はいつまでも忘れない。本校の揺籃期にサークル「茶話会」が度々催された明治期の「神龍寺本堂」

平成24年6月12日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

日々の生活からは想像できないほどの異彩を放し、絆を深め合う特別活動(行事・部活動等)。今年の「一高祭」も、多くの生徒にとって、汗だくの爽快感や、やり遂げた成就感に酔いしれ、記憶に残る“祭”になったに違いない。

そもそも、本校の特別活動は明治30(1897)年の開校と同時に始まった。校舎さえない多事多難のなか、生徒達は積極果敢に挑み、年々活動を活発化させていった。今号から少し、草創期の本校の特別(課外)活動を辿ってみたい。

進修會(現在の「生徒会」)の発足

恩師先生の授業は忘れてしまっても、いつまでも忘れないのが特別活動(行事や部活動等の課外活動)に懸けた輝きの残像。それは、感動と興奮、挫折と希望、無念と歓喜、といった筋書きのない「熱きドラマ」に身を焦がし、完全燃焼の醍醐味を若い命に刻み込こんだからにほかならない。この特別活動について、今号は、本校の創立直後から発刊されてきた『進修』(明治33年1月「第1号」)と明治39年3月「第7号」を通して、探ってみよう。



神龍寺24世住職梅峰大和尚(戦前にあたる銅像)。旧土浦中学校第1回入学生で、開校間もない時期の特別活動に大いに尽力

明治30(1897)年に、茨城県尋常中学校土浦分校(学校長今井恒郎、分校主任畑勇吉)として産声を上げた本校は、土浦城内(現亀城公園)の新治郡役所2階などを借り受け、4月22日から授業を始めたが、同時に80名の第1回入学生達は、さっそく放課後の活動(特別活動)も始動させた。同好の士が野球などのサークルをつくったのだ。しかし、学校自体が借家住まいであったため、活動場所の確保は難儀をきわめた。そうした中で、出身地別、クラス別に集まる茶話会だけは、頻繁に回を重ねた。会場は市内の寺、特に文京町の神龍寺が多かった。

それは、神龍寺が学校の近くであったばかりでなく、神龍寺23世住職の二男であった秋元梅峰氏(第1回入学生、後に

神龍寺24世住職、社会慈善活動に力を尽くすとともに、日本三大花火大会の一つとされる土浦全国花火競技大会の創始者)のほからいによるところが大きかったと考えられる。

開校から数ヶ月、学校生活が落ち着きを見せ始めていた頃、誕生していたサークルを取りまとめるべく、1回生の山口剛氏(後に早稲田大学教授、江戸文学者)、成井藤三郎氏、中山庄一郎氏(後に土浦中学教諭)らは駆けずり回った。その結果、明治30(1897)年(翌31年説も)12月3日に、諸グループが一同に会し、「進修會」を発足させた。そしてこの下に雑誌部・演説部・體(体)育部の三部を設け、組織として体裁を整えたのだ。



市指定史跡にもなっている山口剛先生の墓(土浦市・浄真寺)

三部の活動内容をみると、雑誌部は学術の研究知識の交換を目的とし、かつ本会一般の記録報道の機関たるものとし、毎学期1回雑誌『進修』を発刊して会員に配布する(事情により回数は増減できる)とある。演説部は知識の交換、弁舌の錬磨を目的としていた。體育部は、心膽(心胆)を錬磨し、身体を強健にするを目的とするとし、撃劍柔道科と野球遊技科に分かれていた。この二つをみると

生徒達の人気は野球に集中したらしく、「撃劍柔道科に要する稽古着竹刀類は、当分、数を定めて各級(各学年ごと)に配与す」となっていたのに対して、「野球遊技科に要するボールその他の器具は数を定めて各組(各組ごと)に配与す」となっていた。ただ、「器具の保管は幹事(担当教諭)之を掌る」とあるように、現在の部活動とは異なり、あらまし、放課後のレクレーション程度の活動であったと言えなくもない。

「進修」の名の由来とその運営

ところで「進修」の名は『易経』の「君子進徳修業」の語句からとったものである。つまり、進修會は、まさに生徒と教師が共に「進徳修業」を実践していくための組織として呱呱の声をあげたのだ。このことについて、進修會雑誌『進修』第一號序に筆を取られた水戸学の大家、名越時孝先生(1855〜1929。弘道館に学び、茨城師範学校教師・茨城中学校教師・慶応義塾講師などを経て、明治21(1888)年から10年間、徳川家の『水戸藩史料』編纂に従事。明治32年6月から明治41年3月まで土浦中学校教諭。その後水戸中学校教諭を勤めた)は、「土浦中学校において進修會が設立された。授業の余暇に、師弟が相い会して切磋琢磨し、武芸の技や演説の術を磨き、詩文を編んでいく。こうして剛健、進取の気を養っていくことこそ「進修」の名にふさわしいものであり、会員一人ひとりに学術の根幹を扶植することになる」と、その意義を強調されている。さらに会の設立と同時に、「進修會規約」も次のように制定されている。

目的

本会の目的は徳智體三育の趣旨に基づき文武の学芸を講究し兼ねて相互の交誼（こうぎ 友誼を促進する）にして以て当校の教養を輔翼（ほよく 補佐）し校風を懿美（いび うるわしく美しいもの）ならしむるにあり

役員

特別会員 当校職員

賛助員 元当校職員

通常会員 当校生徒

役員

会長一名

当校主任教諭を推す

副会長一名

当校職員中より会長之を委嘱す

幹事若干名

当校職員中より会長之を委嘱す

委員若干名

通常会員（生徒）中より之を選定す

会計掛一名

当校職員中より会長之を委嘱す

任期は会長の外一年

役員

委員

会長ならびに各幹事の指揮を受け

各部の事務を掌る

特別会員

各自心分に寄付するものとする

通常会員

毎月（ただし八月を除く）金八銭

宛授業料と共に書記に納付する

（抜粋）

この規約にもとづき会長には分校主任畑勇吉先生が推挙され、副会長・幹事には各先生方が、会計掛には事務職員が委嘱された。生徒委員も山口剛氏をはじめ各部ごとに選出された。この生徒委員については、当初は生徒の互選によるものではなく、先生方の推薦を受けた者が任命されたようである（明治32年頃からは委員選挙が実施された）。また、企

画・運営では、雑誌『進修』の原稿や演説の内容は「學術の範囲内に於いてし政事問題等に渉ることを許さず」とあるように、先生方が『進修』の原稿を吟味し、会長の検閲を経て発刊したり、「演説の演題及び主旨をあらかじめ幹事の先生に差し出すべし」を徹底したりしていた。従って、自由な表現や発表あるいは生徒の自治などの考えは、教師側にも生徒側にも全くなかった。さらに財務担当の会計掛も職員が担当したように、現在の生徒会とは違い、運営は、学校や教師の監督のもとになされ、生徒達もそれを当然の事として受けとめていたようだ。

進修會主催の「運動會」は神立原で

「進修會」設立後、雑誌部・演説部・體育部、それぞれが活動を本格化させる一方で、進修會にとつて、最大の行事は運動會。明治31（1898）年には、春季運動會を6月19日に、秋季運動會を11月12、13日に、神立原で盛大に開催。神立原は、現在の神立中央から中神立町にかけての一带と考えられ、神立駅近くのバス停に「神立原」の名をとどめている。神立原では、翌年もまた、5月14日に第1回運動會を挙行した。このときの種目は、三年対二年の野球試合、400ヤード・障害物・二人三脚等の競走、綱引きなどであった。前年同様、新治郡長をはじめ、県南地区の名士や一般客が多数詰めかけ、地域の「一大祭典」の様相を呈していた。しかし、秋の運動會は開かれなかった。それは立田町に新校舎（現土浦二高）が竣工し、その移転準備に生徒も忙殺されていたのではないかと推測される。（同年12月21日には移転完了）



JR神立駅から歩 10 分「神立原」バス停。この帯は、明治 30 年代には「スポーツのメッカ」で、本校の運動會の会場となった。また第1回県下連合野球大会（現在の高校野球選手権大会）も開催された

翌明治 33（1900）年4月1日になると、分校は、茨城県土浦中学校（初代校長福山義春、分校を龍ヶ崎町に設置）と改称し、独立に至る。あわせて渴望していた新校舎での授業も軌道に乗り始め、前途洋々、旭日昇天の空気に満ち溢れていたのは、容易に想像できる。そしてその年の第2回春季運動會は、校庭が未整備であったため、会場はまたまた神立原。初日の4月28日は二・三・四年学年対抗野球試合、翌29日は、一軍選手による三・四年対抗野球試合、撃剣の野試合、屋外の剣道試合、さらに運動會らしく400ヤード走なども行われた。福山校長も職員200ヤード競走に出場し、6位に入賞。その一方で、地域を挙げた大イベントには、柏田茨城県知事も来臨し、生徒の奮闘ぶりを観戦していた。同知事は4月18日にも来校し、授業の巡視や生徒への説話に時間をさいた。校舎創設と独立が同時に成り、教育活動の充実に一層弾みがつく土浦中学校に対し、県当局が大いに期待を寄せていたのが窺え知れる。

「ゲート」と「仮装行列」の始まり

明治 34（1901）年には春季大運動會は5月17、18日に実施。会場が初めて自

らの校庭となつたうえに、中学校として5学年すべてが揃った年度。意気上がる生徒達は、この日を待ちかねるとともに心躍らせ、「ヤルぞー！」の気概が脈打ち、運動會に全精魂を傾ける。三年生は西門町（神龍寺付近）と鷹匠町（土浦警察署付近）の通用門に渾身のアーチをしつらえる。元祖「二高祭ゲート委員会」だ。また四・五年生有志は樂隊を編成し、祭典に彩りを添えようと必死に取り組む。午前6時。花火の打上げとともに、土浦町内の人々、真鍋小・土浦小の児童、龍ヶ崎分校の生徒など、多数の観客が押し寄せる。場内は混雑をきわめ、整理の警官が出動するほど。種目は陸上競技、野球、撃剣野試合など。勝者は音楽隊の演奏に合わせ、場内を周回する。パフォーマンスを披露する。またこの年には仮装行列が始めて登場。特に音楽にあわせた軽妙な仕草の七福神は大喝采を浴びた。仮装行列と言え、明治37（1904）年5月の運動會では、日露戦争の戦闘シーンが演じられた。余りにもリアルな構成と迫真の演技に、まるで戦場を觀戦しているようだ」と評判になった。この仮装行列はその後土浦一高にも受け継がれ、體育祭の呼び物となっている。（次号に続く）



6. 370 人ももの来場者があつた今年の「一高祭」。入場受付ゲートには多数の人々が立ち並ぶ。ゲート内部は鮮やかな極彩色の『万華鏡』世界（左上）